

## 第12回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（佳作）】

アゲハ蝶

池永 恵子・和歌山県橋本市

兄の七回忌を去年営んだ。

葬儀の頃には思いも及ばなかったコロナ禍のため、場を宗派の寺の開放された本堂にして、母と、私の家族だけで数珠を持った。

衣擦れの音と共に、二人の僧が現れた。頭を下げようとしたその時、ふと天井を見上げた住職につられ、一同、彼と同じ方を向いた。

一羽の黒いアゲハ蝶が、優雅に舞っていた。

思わず上げた明るい声に、老僧が口を開く。

「蝶は死者の化身ともいいます。もしかしたら仏さんが、『今日は皆さん、よう集まってくれはりました。ありがとうございます。ご苦労さん』って、挨拶に来はったんかもしれないなあ」

梅雨時の、花木の緑が豊かな敷地から屋内に、風に乗った蝶が迷い込むのは、珍しい事ではないのかもしれない。それでも僧侶の慈悲深い言葉は胸に沁み、私の心を慰めた。

三才違いの兄は、還暦を目の前にながら、令和の時代を待たずして、病で亡くなった。

高校を卒業後、働きながら夜間大学に通い、中学校の教師になって、家計を助けてくれた。

生涯独身だった事が、母の心残りである。

兄は余命を悟ると、一人暮らしになる母を想い、実家の電球を全てLEDに替えていた、その静かな背中が、今も私の瞼の裏に残る。

法事を終え帰宅した私は、長い間記憶の隅に追いやっていた、ロゴ入りの箱を押し入れから取り出した。中には、兄が緩和ケア病棟のベッドから、私の知らない内にネットで購入していた、黒いショールが入っている。これを目にしたのは、兄が亡くなった後だった。

実家に届いた宅配便の封を開けた日が思い出された。私がショールの箱を取り出すと、その下からは、もう一つ箱が出てきた。

電動髭剃りだった。私は言葉を失った……。

新しく買い替えていた髭剃りは、容体とは裏腹に、兄がまだ自分の髭が伸びる日々があると信じていた事を、物語っていたからだ。兄の気概を痛いほど感じて、私は茫然とした。

それと同時に、兄が緩和ケア病棟に入院する前に、同席を求められた診察室が蘇った。

主治医は、これが最後となる薬を試すかどうか、私を交えて話をしたい、と切り出した。

その薬は若干の延命の可能性を残すものの、今より、更に強い副作用が予想されるといふ。

私は兄の体が、それに耐えられるのか心配だった。側で見る母の顔も脳裏に浮かんだ。

「恵子は、どう思う？」

兄は今迄、何事も自分で決めてきた人だ。

その考えを尊重するしかないと思っていた。

「お兄ちゃんの、考える通りでいいと思うよ」

兄は一度目を瞑ってから、医師に伝えた。

「僅かな延命なら意味がない。薬はやめます」

兄はきっぱりそう言っ、治療の継続を自ら断ち切った。と、私は、そう思った。

ところが少しの間の後、兄がふと漏らした。

「もし恵子が『薬、使ってみたら』って言うたら、試す気も、ちよつとあつたんやけどな」

驚いた私が「えっ」と言うと、兄はすぐに、「言うただけや」と微笑み、話題を変えた。

以後兄は、二度とその話はしなかった。

あの日医師の前で、兄は妹の私に、背中を押してもらいたかったのだ……。

残された髭剃りを見て、私は後悔にさいなまれた。だから、それを形見分けにした後も、

同じ荷に入っていたシヨールは触れなかつた。

そんな心境が、七回忌で変わった。

読経が響く本堂で、皆の頭上をゆつくり旋回していたあのアゲハ蝶は、正に老僧の語り通り、翅を得た兄が生前の律儀さそのままに、私たちに会いに来てくれたように感じたのだ。

シヨールを箱から出し、初めて手にした。

ふわりと柔らかかった。新品の匂いがした。

母からは以前、入院の度に世話になる私へと、兄が選んだ高価な物である事や、黒が一番重宝する、と助言した時の話を聞いていた。

黒一色に見えていたその布は、よく見ると、更に濃い黒で細かい模様が施されていた。

頬にあてると、何だか気持ちが悪く落ち着いた。

思わず、「お兄ちゃん」と掠れた声が出た。「一日でも長く、生きたかったよね。せやのに、

あの時、私……、ごめんね」

黒い布に顔を埋め、堅く目を閉じた。ふと、優しかった兄との思い出が、瞼裏に蘇った。

二人で留守番をしていた夜、落雷で停電した事があつた。私は七歳で、怖くて泣いた。

兄は懐中電灯を探し、その灯りで私を励まし続けてくれた。きっと兄も怖かつただろうに。

おもむろに、シヨールを羽織ってみた。部屋は蒸し暑かつたけれど、肩に掛けてみたかつ

た。ゆつたりと体を覆う大判のそれは、寒冷地に住み、背中や足腰が冷えると溢していた私

を、兄が慮ってくれた物だと分かる。

お陰で、このシヨールで寒さを防ぐのが常になり、今では手放せなくなつた。

「お兄ちゃん、ありがとう。あつたかいよ」

天を仰いでそう話しかけると、私の白い息は、たちまち青い空に吸い込まれていった。